

熊本遺跡 3

－第3次調査報告－

2015

福岡市教育委員会

序

福岡市は、原始より大陸文化流入の門戸として栄え、市内に多くの埋蔵文化財が残っています。このため、先人たちの足跡である埋蔵文化財の保護に努めるとともに、まちづくりの目標のひとつに「海と歴史を抱いた文化の都市」を掲げ、実現を目指しております。

本書は、宅地造成に伴う熊本遺跡第3次発掘調査について報告するものです。この調査では古墳時代や古代の集落跡を検出するとともに、縄文時代の遺物も多数出土しました。これらは地域の歴史の解明を進める上で重要な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心より感謝を申し上げます。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 酒井龍彦

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
1. 発掘調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境	2
1. 遺跡の位置	2
2. 遺跡の歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の記録	4
1. 試掘調査の概要	4
2. 発掘調査の概要	5
3. 造構	6
4. 造物	13
第Ⅳ章 まとめ	14

挿図目次

Fig. 1 調査位置図 (1/250,000)	1
Fig. 2 調査地周辺遺跡分布図 (1/50,000)	3
Fig. 3 調査位置図 (1/5,000)	4
Fig. 4 試掘調査坑穴配置図 (1/900)	4
Fig. 5 試掘調査土層略図	4
Fig. 6 試掘調査状況 (①Tr.1 ②Tr.2 ③Tr.3)	4
Fig. 7 SC07 カマド調査風景 (東から)	5
Fig. 8 SC08 調査風景 (東から)	5
Fig. 9 調査範囲図 (1/600)	7
Fig. 10 造構配置図 (1/200)	7
Fig. 11 SC04 造構実測図 (1/50)	8
Fig. 12 SC07 造構実測図 (1/50)	9
Fig. 13 SC07 カマド造構実測図 (1/20)	9
Fig. 14 SC08 造構実測図 (1/50)	10
Fig. 15 SK05 造構実測図 (1/40)	11
Fig. 16 SC04 出土遺物実測図 (1/3)	13
Fig. 17 SC07 出土遺物実測図① (1/3・1/4)	14
Fig. 18 SC07 出土遺物実測図② (1/3)	15
Fig. 19 SC08 出土遺物実測図 (1/3)	15
Fig. 20 SK05 出土遺物実測図 (1/3・1/4)	15
Fig. 21 出土石器実測図 (1/1)	15

図版目次

P.L. 1 調査地周辺航空写真 (1961年撮影)	P.L. 7 (5) SC07 カマド検出状況 (南から)
P.L. 2 調査地周辺航空写真 (1987年撮影)	(6) SC07 カマド内支脚検出状況 (南から)
P.L. 3 (1) 第1調査区(南から)	(7) SC07 カマド壁体截断状況 (南から)
(2) 第1調査区(北から)	(8) SC07 カマド壁体截断状況 (東から)
P.L. 4 (1) SC01 (南東から)	P.L. 8 (1) 竪穴住居 SC08 (北東から)
(2) SC01 (北西から)	(2) SC08 カマド検出状況 (南から)
P.L. 5 (1) 第2調査区(西から)	(3) SC08 カマド壁体截断状況 (南西から)
P.L. 6 (1) 第2調査区中央部 (北から)	(4) SC08 カマド壁体截断状況 (南東から)
(2) SC07 (西から)	P.L. 9 (1) SK05 (東から)
P.L. 7 (1) SC07 遺物出土状況 (西から)	(2) 第3調査区 (西から)
(2) SC07 遺物出土状況 (南から)	P.L. 10 出土遺物 (1)
(3) SC07 遺物出土状況 (南から)	P.L. 11 出土遺物 (2)
(4) SC07 瓶出土状況 (南西から)	

例　言

- 本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区東入部2丁目地内の住宅地造成予定地内において、2013年度（平成25年度）に実施した熊本遺跡第3次発掘調査報告書である。
- 実測図に付した座標値は平面直角座標系第Ⅲ原点系（世界測地系）で、方位（磁北）は真北に対して6°18'西偏する。
- 本書では遺構ごとに一連の遺構番号を付け、番号の前にSC（竪穴住居）、SK（土坑）などの遺構の性格を示す分類記号を付した。
- 本書に係る遺物の実測は上方高弘が行い、遺構の実測および遺構・遺物の写真撮影は渡本正志が担当した。
- 本書の執筆・編集は渡本正志が担当し、萩尾朱美、田中ヤス、中岡千衣子の協力を得た。
- 本書の発掘調査に係る遺物・記録類のすべては、福岡市埋蔵文化財センターに収載されている。

調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地	面積	調査期間
3次	1319	KMM-3	早良区東入部2丁目	365.3m ²	2013.8.19 ~ 2013.10.18

第Ⅰ章 はじめに

1. 発掘調査に至る経緯

福岡市埋蔵文化財審査課は、平成25年5月1日付で福岡市早良区東入部2丁目1785番1外3筆における住宅地造成工事に先立つ開発計画事前協議申請書（第25-8号）が提出されたのを受け、当該地の埋蔵文化財の有無についての書類審査を行った。その結果、申請地（2260m²）は埋蔵文化財包蔵地域の「熊本遺跡」内に位置すると共に、当該地に西接する住宅地の試掘調査（審査番号22-2-803、試掘番号22-260）でも地表下40cmにおいて遺構の存在が明らかとなっていることから試掘調査が必要との判断に至った。試掘調査（試掘番号25-79）は、平成25年6月6日、申請地を横断するように東西方向に3本のトレンチを設定してを行い、地表下40cmの黄橙色砂質土層上面において竪穴住居、土壙、溝、小穴を検出すると共に遺構埋土から土師器、須恵器、鉄滓を採取した。以上から、申請地全域においては古墳時代を中心とした集落跡が存在していることが判明した。

埋蔵文化財審査課は試掘結果を受け、計画される開発事業が実施された場合には遺跡に影響が及ぶものと判断し、事業者と文化財の取り扱いについて協議を行った。その結果、事業地の公共予定地範囲（道路部分）については記録保存のための発掘調査を実施し、宅地予定地部分については住宅建設予定者が個々に別途申請して対応することとなった。

その後、平成25年8月1日付けで地権者を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年8月19日から発掘調査を、平成26年度に資料整理および報告書の作成を行うこととなった。

2. 調査の組織

調査委託 ディー・アンド・エイチ株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

平成25年度（調査）	平成26年度（整理）
西島 裕二	西島 裕二
宮井 善朗	常松 幹雄
瀧本 正志	瀧本 正志
横田 忍	横田 忍
比嘉 えりか	比嘉 えりか



Fig. 1 調査地位置図 (1/25,000)

【国土地理院発行20万の1 地図図（福岡）を使用】

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地

早良平野中央部を北へ貫流する室見川や平野東部を北流する金屑川の支流によって解析・形成された扇状地の低位段丘上には多くの遺跡が所在する。熊本遺跡は早良平野奥部の東縁を画す荒平山の西裾に沿って連続と存在する遺跡のひとつである。調査地は、熊本遺跡の南央部に位置する雑壇状の畠地で、標高32mほどを測る。

2. 遺跡の歴史的環境

周辺遺跡について、遺構や出土遺物から時代別に概観してみることにする。

旧石器・繩文時代早期には、遺跡が平野の中位段丘や洪積台地上に点在している。旧石器時代の主な遺跡として有田遺跡、飯倉遺跡、野芥遺跡、東入部遺跡があり、ナイフ型石器や細石刃が出土している。繩文時代早期ではクエゾノ遺跡に代表される。前期になると四箇遺跡や田村遺跡のように堅穴遺構や轟B式土器、曾畠式土器を伴う遺跡が沖積平野の微高地上にも認められる。中・後期では、有田遺跡で貯蔵穴ピット、四箇遺跡で堅穴住居、埋甕、堅穴などが認められる。晩期になると、重留遺跡で堅穴住居、遅れて有田七田前遺跡、拾六町ツイジ遺跡、四箇遺跡、四箇東遺跡、田村遺跡などで堅穴住居や埋甕などとともに大陸系磨製石器や木製農耕具などが出土している。

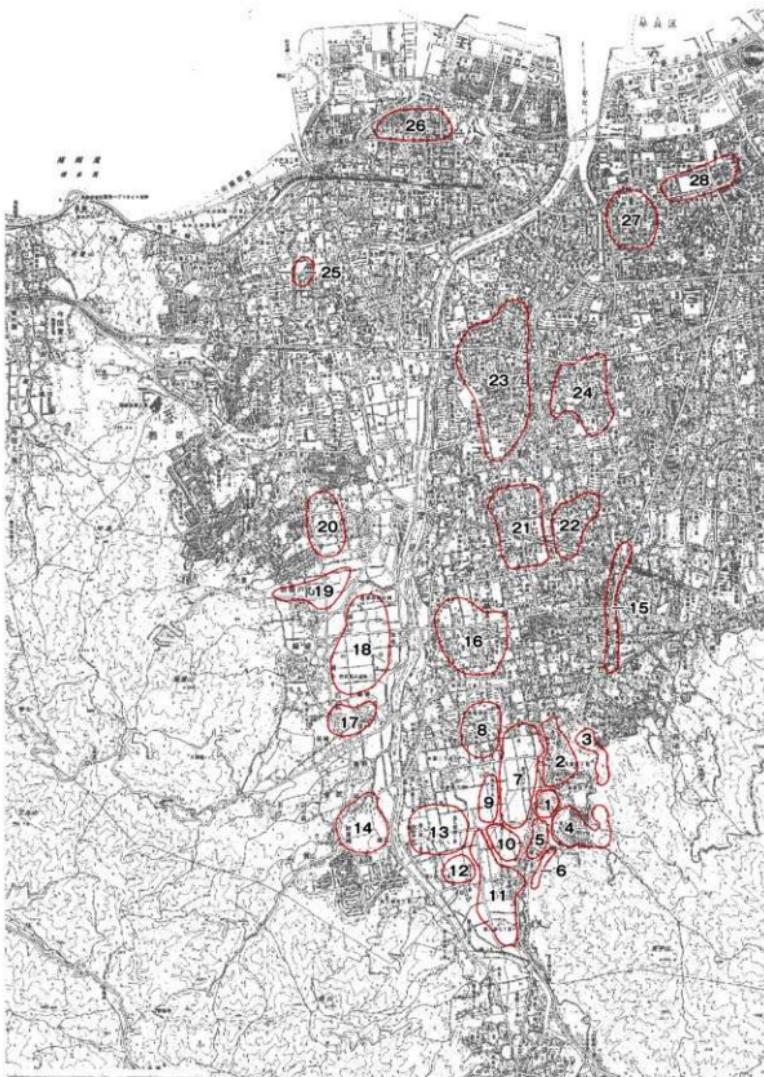
弥生時代前期前半は、繩文時代からの流れを引き継ぐように海岸部の中・低位段丘上に多く、洪積世台地の有田遺跡には大規模な環濠集落が出現し、藤崎遺跡では土壙墓群が見られる。また、内陸部の東入部遺跡や野芥遺跡でも土器が出土している。前期後半からは平野の広範域で集落や壙棺墓などが展開し始め、有田遺跡、田村遺跡などの他に飯倉遺跡や東入部遺跡などがあげられる。中期には、更に面と数量的な広がりを見せ、平野の奥に位置する岩本遺跡では水田が検出されている。海浜部の西新町遺跡では無文系土器、板状鉄斧などが出土して海洋交易拠点的性格を呈する。原遺跡では半島系土器、東入部遺跡の壙棺墓群からは細形銅劍、銅劍、素環頭刀子、鉄矛、鉄刀、鉄劍、鉈、飯倉C遺跡の壙棺墓からは細形銅劍、素環頭大刀、有田遺跡の壙棺墓からは細形銅弋・前漢鏡などが出土している。後期では飯倉D遺跡の集落から小型仿製鏡の鋳型や鐵器鍛冶関連遺物が出土している。

弥生時代終末から古墳時代前期にかけては、海浜部に位置する藤崎遺跡や西新町遺跡では作り付けのカマドを持つ堅穴住居や三角縁鏡を副葬した方形周溝墓が出現し、併せて半島系の漁具や瓦質・陶質土器などの出土が顕著となる。平野部でも台地の有田遺跡や奥部の重留遺跡で集落が認められる。古墳時代中期では、クエゾノ古墳群で前方後円墳（1号墳）、重留遺跡で全長70m級の前方後円墳（拝塚－重留1号墳）や方墳（重留2号墳）、飯倉D遺跡で全長27m級の前方後円墳（梅林古墳）などの首長墓がある。また、先代から継続する半島系との強い繋がりを示す遺構や遺物を伴とする遺跡として、重留遺跡（須恵器窯）、梅林遺跡（オンドル住居・大型建物）、クエゾノ古墳群（鍛冶工房関連）、有田遺跡・吉武遺跡（半島系土器）がある。古墳時代後期になると、重留古墳群、三郎丸古墳群に代表される古墳群の造営が山麓部で開始し、以降は荒平丘陵でも数多く築かれる。集落は、有田遺跡、原遺跡、田村遺跡、飯倉遺跡、重留遺跡、東入部遺跡で見られる。

古代では、有田遺跡で郡衙と推定される建物群が検出され、重留遺跡や吉武高木遺跡でも官衙や寺院と推定される遺構や遺物が見られる。

中世では、集落や屋敷（館）として田村遺跡、次郎丸遺跡、次郎丸高石遺跡、清末遺跡が検出されている。

【本項は福岡市埋蔵文化財調査報告書第979集2 pを一部改変して転載】



- | | | | | |
|--------------|-----------|-------------|------------|-------------|
| 1. 熊本遺跡 | 2. 重留村下遺跡 | 3. 重留古墳群 G群 | 4. 三郎丸古墳群 | 5. ヒワタシ遺跡 |
| 6. 荒平古墳群 | 7. 重留遺跡 | 8. 四箇道跡 | 9. 四箇船石遺跡 | 10. 岩本遺跡 |
| 11. 東入部遺跡 | 12. 安通遺跡 | 13. 清末遺跡 | 14. 浦江遺跡 | 15. 野芥遺跡 |
| 16. 田村遺跡 | 17. 郡地遺跡 | 18. 吉武・高木遺跡 | 19. 羽度原C遺跡 | 20. 戸切遺跡 |
| 21. 次郎丸・高石遺跡 | 22. 免進跡 | 23. 有田遺跡 | 24. 原遺跡 | 25. 下山門敷町遺跡 |
| 26. 綾浜遺跡 | 27. 藤崎遺跡 | 28. 西新町遺跡 | | |

Fig. 2 調査地周辺遺跡分布図 (1/50,000)

第三章 調査の記録

1. 試掘調査の概要

対象地は3筆からなる旧耕作地で、直近まで畑や水田として営農され、南方に向かって階段状に高くなる。標高31.6m～32.5mを測る。試掘調査（試掘番号25～79）は、平成25年6月6日、Fig.3～6に示すように申請地の北部・中央部・南部の3ヶ所に東西方向の試掘坑を設定し、実施した。

結果、いずれの試掘坑においても地表下40cmで地山の黄褐色砂質土（花崗岩風化土：マサ土）に達し、地山上面において黒褐色～暗褐色砂質土を覆土とする土壤・柱穴・竪穴住居の存在を確認した。現況と地形と南方向へ上り勾配を呈する推定旧地形との差異は、後世の畑作などによる標高の影響を示していると考えられた。遺物は、遺構覆土から須恵器、土師器、鉄滓を採取した。遺構・遺物の状況から、申請地全域に古墳時代の集落が展開していると想定された。さらに、試掘坑における遺構の切り合いなどから、二時期の遺構が存在していると判断された。

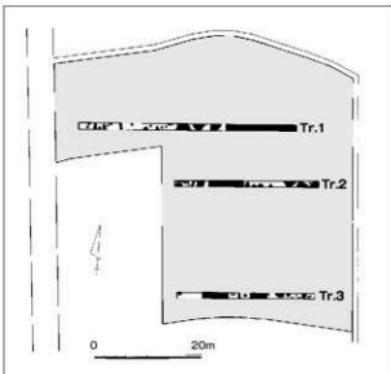


Fig. 3 調査地位置図 (1/5,000)

Fig. 4 試掘調査坑位置図 (1/900)

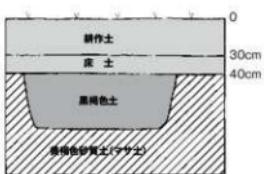


Fig. 5 試掘調査土層略図

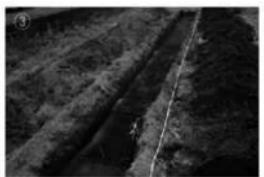


Fig. 6 試掘調査状況 (① Tr.1 ② Tr.2 ③ Tr.3)

2. 発掘調査の概要

調査地は、早良平野奥部の東縁を画す荒平山の西麓に沿って連綿と存在する遺跡のひとつである熊本遺跡の南央部に位置する畠地で、標高約 32m を測る。調査地を含む開発地は、3段の雑壇状を呈し、北へ下る。金屑川の支流によって解析・形成された扇状地の底位段丘上に立地する周辺遺跡での発掘調査例は少なく、本調査地の南東 130m のヒワタシ遺跡 1次調査で古墳時代～古代の遺構が発見されているのみである。

発掘調査範囲は、試掘調査によって判明した宅地造成工事予定地全域に遺構が広がっている点と造成工事で遺跡に影響を及ぼす範囲が工事完了後に福岡市に帰属する道路等部分である点を踏まえて、L 字状の平面形を呈する道路予定地域だけとした。宅地予定部分については、本造成工事において遺跡に影響を与える行為は所在しないことから調査対象外とし、新たなる建築工事が生じた場合においては工事内容に応じて個々に対応することとした。

調査は、排土置場の関係などから、調査区を南北で二分割し、更に北区を東西に二分割する計 3 区を設定して実施した。遺構検出作業は、調査原因となった宅地造成工事で遺跡に影響が及ぶ道路予定範囲の耕作土・床土を重機によって地表下 40cm の地山（マサ土）面まで除去した後、人力によつて行った。遺構検出面の大半を占める地山は、花崗岩風化土が単純堆積した黄褐色砂質土で、一部には複層堆積の部分も認められる。遺構面の形状は 3 段からなる階段状の畠であった旧地形に合致し、標高は南部の上段で 320m～321m、中段で 316m～319m、北部の上段で 314m～315m を測る。

検出した主な遺構は、縄文時代後・晩期の土壙 1 基、古墳時代後期の堅穴住居 4 棟、奈良時代後半期の土壙 1 基、柱穴、小穴等である。縄文時代の土壙からは黒曜石製石鎌のほかに多量の剥片が出土している。堅穴住居の堅穴は方形の平面形を呈し、北壁には作付けのカマドを有する。奈良時代の土壙は方形の平面形を呈し、土師器や須恵器がまとまって出土した。柱穴の大半は径 25cm 前後を測るが、明確な建物としては確認には至らなかった。

遺物は、土師器、須恵器、石製品等がコンテナ箱で 10 箱出土し、遺構として残存が明確に認められなかった部分も含む調査地における歴史的変遷を示すものであった。

発掘調査は、2013 年 8 月 19 日に開始、同年 10 月 18 日に終了。調査面積は 408.7m²を測る。

資料整理・報告書作成は 2014 年度に実施し、2015 年 3 月 25 日に調査報告書を刊行するに至った。



Fig. 7 SC07 カマド調査風景(東から)



Fig. 8 SC08 調査風景(東から)

3. 遺構

検出した主な遺構は、縄文時代後・晩期の土壙1基、古墳時代後期の竪穴住居4棟、奈良時代の土壙1基、柱穴、小穴等である。

(1) 竪穴住居 (SC)

SC04 (Fig 10.11 PL. 3~5)

第1調査区北辺部に位置する方形の竪穴住居跡で、竪穴の北東隅部は調査区外に位置し、全容は不明であるが、竪穴規模は残存する上縁で方5.5mが復元される。床面は平坦で、方5.2mが復元される。壁面は僅かに外反するものの直線的に立ち上がり、壁高0.4mほどが残存する。床面の柱穴から、建物の屋根支えは柱が四本立ての構造で、径15cm~20cmほどの丸太を用いていたと推定される。北壁中央部においてテーブル状に幅0.5m×奥行0.5mで暗橙灰色を呈する部分がある。他の竪穴住居跡で看られる作り付けのカマドの被熱状況とは異なるものの、カマドの可能性を残す。住居竪穴の覆土は、床面直上に黒灰色土、その上層に黒褐色土が堆積している。覆土中からは土師器甕・高杯、黒曜石剥片の他、低温度酸化炎による須恵器片が多く出土している。

SC06 (Fig 10 PL. 3, 6)

第1調査区北辺部、竪穴住居SC04の西隣りに位置する竪穴住居跡で、竪穴の北東隅部を検出した。遺構の大半は調査区外に抜がり竪穴住居の規模および構造は不明であるが、方4m以上の建物規模が推定される。残存する壁高は5cmを測り、検出された範囲内で壁溝などは認められない。住居跡の覆土は黒褐色土で、土師器甕が出土している。

SC07 (Fig 10.12, 13 PL. 5~7)

第2調査区東部南辺、SC04の西に位置する隅丸方形の平面形が推定される竪穴住居跡である。住居の北面壁にはカマドと戸外に連続する煙道を有する。竪穴の北半部を検出し、南半部は調査区外に所在して全容は不明であるが、竪穴は残存する上縁で方4.3mが復元される。竪穴壁は僅かに外反しながら直線的に立ち上がり、25cm程の壁高が残る。屋根構造は方2.1mに配した4本柱によるものと推定される。柱穴掘方は径30cmほどを測る。壁溝などの付帯施設は認められない。

カマドは竪穴住居の北面壁中央部に粘土を幅0.9m・奥行0.7m・高さ0.3m~0.4mのドーム状に盛り上げて塗いている。開口部は、甕や鍋などを仕掛けるための据付口をドーム頂部である天井中央部と、燃料の薪などを投げ入れるための焚口をドーム住居側の壁面部に設けている。カマドは被熱のために橙灰色~橙褐色を呈し、据付口は崩落し、凹みには甕(23)が割れた状態で出土している。焚口は、両袖に花崗岩が立って原形を残すが、本来アーチ形の天井部は崩落している。カマド燃焼床面は奥に向かって緩やかな下り勾配を呈し、中央部には仕掛けた鍋などの落下を防ぐために直方体の石を立てて支脚としている。支脚の石が埋め込みによる設置であることから、カマドを塗いた当初からのものと判断されよう。先の据付口の凹みで出土した土器は、正しくこの石製支脚の真上に位置している。

カマドには排煙施設であるトンネル状に設けた煙道をカマドと一体化して設けている。煙道は、径20cmのトンネルをカマド奥壁からカマド中心延長線より右方75°に折り曲げて設けており、残存長は3mである。煙道が焚口からカマド奥壁を通り一直線状に戸外に設けていない事実は、煙道設置の必要性と設置作業の効果とを考えた場合には理解しがたい。

遺物は、住居床面直上から須恵器甕・坏身・坏蓋・高杯、土師器甕、黒曜石剥片が出土している。カマドの周辺では煮炊きに関連する土器が集中して出土しておるが、特に焚口前では小型の鉢(3)に甕(2)を倒置して被せた出土状況は注目される。カマド廃棄に際しての儀礼的なものなのかは不明。

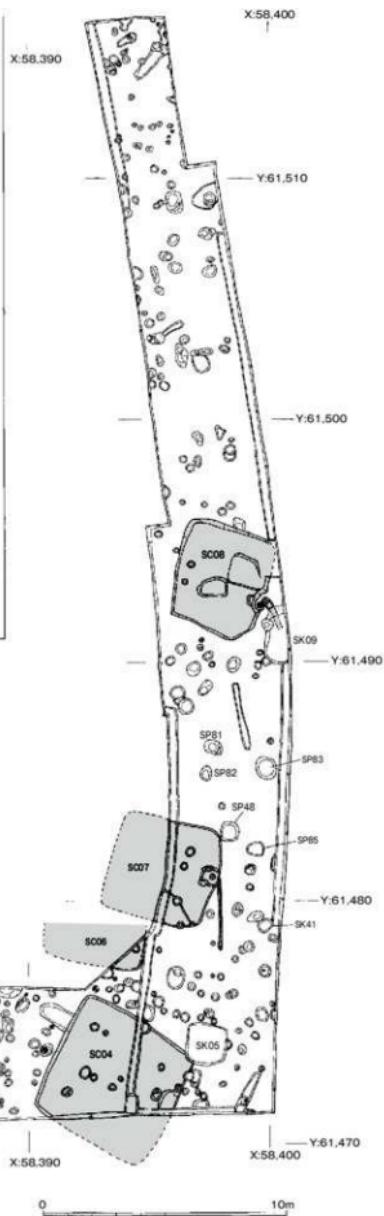
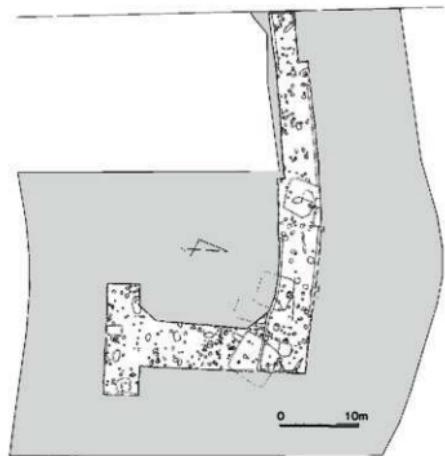


Fig. 10 遺構配置図 (1/200)

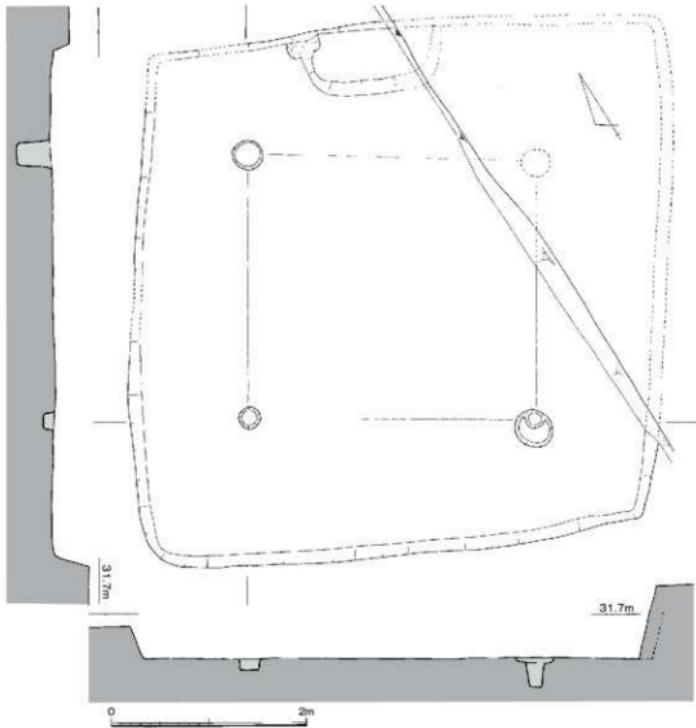


Fig. 11 SC04 造構実測図 (1/50)

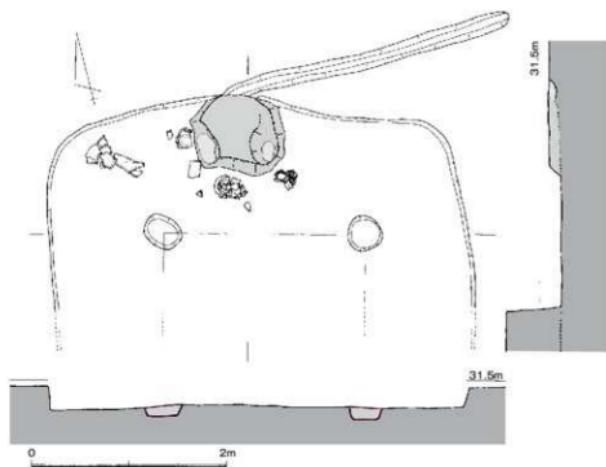


Fig. 12 SC07 遺構実測図 (1/50)

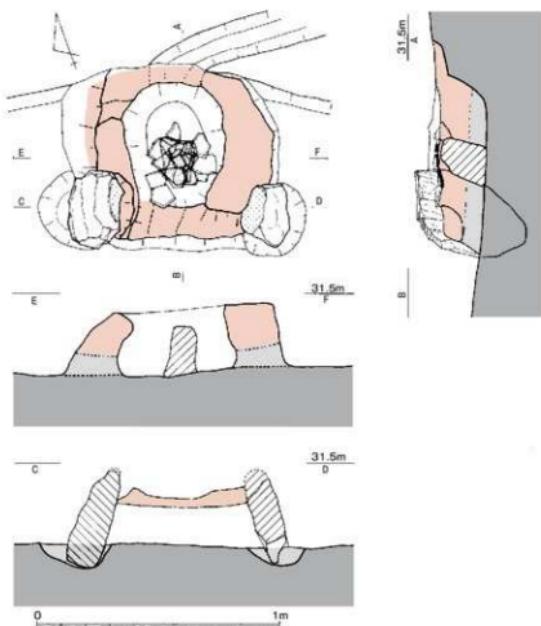


Fig. 13 SC07 カマド実測図 (1/20)

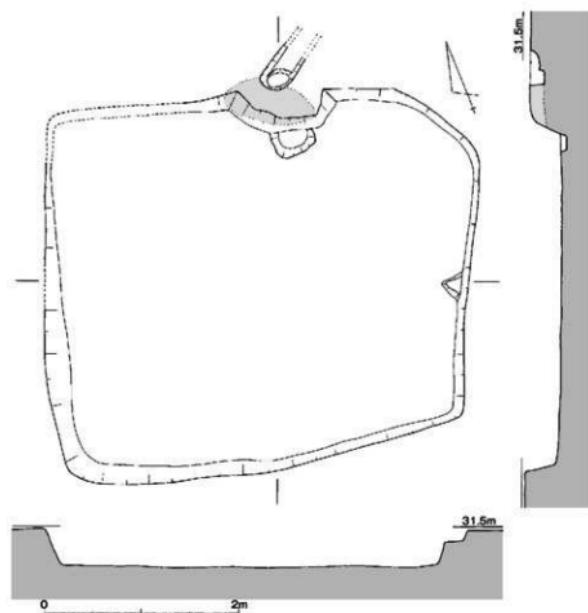


Fig. 14 SC08 遺構実測図 (1/50)

SC08 (Fig. 10.14 PL. 5, 8)

第2調査区中央部に位置し、隅丸長方形の平面形を呈する竪穴住居跡である。住居の北面壁にはカマドと戸外へ連続する煙道を有する。竪穴はやや不整形な隅丸長方形を呈し、南北辺3.8m、東西辺4.3m、深さ0.4mを測る。竪穴壁は床面から外反しながら直線的に立ち上がり、30cm程の壁高が残る。床面において精査を数回試みたが、屋根構造を推定できる資料を確認することが出来なかった。壁溝などの付帯施設は認められない。

カマドは竪穴住居の北面壁中央部に粘土をドーム状に盛り上げて築いているが、残存状況は極めて悪く、全容を知ることはできない。北面壁中央部付近が被熱のために橙灰色～橙褐色を呈し、僅かに残るカマド奥部から、カマドが存在していたことを知る。カマドの規模は、比熱による変色範囲から推定するとSC07のカマドと同程度の大きさであったと考えられる。焚口も不明確で、両袖の構造・材質や支脚の存在なども不明である。なお、袖石を用いた場合に認められる据付穴は確認できなかった。

カマドには排煙施設であるトンネル状に設けた煙道をカマドと一体化して設けている。煙道は、径20cm～25cmのトンネルをカマド奥壁からカマド中心延長線より右方に折り曲げて設けており、SC07と構造や配置を同じくする。煙道は、後出する土壙SK09により消失して全容は不明であるが、全長0.5mほど残存する。

遺物は、住居床面直上から須恵器甕・坏身・坏蓋・高杯、土師器甕、黒曜石剥片が出土している。

(2) 土壙 (S K)

SK01 (Fig 10 PL. 3)

第1調査区南辺中央に位置する隅丸長方形の土壙で、遺構南部は調査区外に広がる。長辺2m・短辺1.4m、深さ0.2mが復元される。遺物は、黒曜石製の石鏃が出土している。

SK02 (Fig 10 PL. 3)

第1調査区南東隅部に位置する隅丸方形の平面形が推定される土壙で、遺構の東部は調査区外に広がり、全容は不明である。方2m、残存する深さは0.4mを測る。遺物は、土師器甕が出土している。

SK03 (Fig 10)

第1調査区北部、SC04の竪穴が埋まった後に設けられた隅丸長方形の土壙である。長辺1.3m・短辺1m、残存する深さは0.2mを測る。土壙壁は比熱により橙灰色を呈し、範囲は壁面から5cm奥に至る。須恵器坏蓋・甕、土師器甕が出土している。

SK05 (Fig 10.15 PL. 3, 5, 9)

第1調査区北部、SC04竪穴の北西隅を壊すように位置する隅丸方形の土壙で、方1.6m、深さ0.6mを測る。床面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。遺物は床面西辺で須恵器坏・皿蓋・甕、土師器甕が集積した状態で出土している他、黒曜石剥片、炭なども出土している。

SK09 (Fig 10)

第2調査区中央、SC08の北東に位置する土壙で、北半部は調査区外に広がる。全容は不明であるが、楕円形の平面形で、長辺2.4m、短径1.4m、深さ0.3mが復元される。SC08の煙道を壊して設けている。遺物は須恵器甕、土師器甕が出土している。

(3) 柱穴・小穴 (S P)

SP46 (Fig 10 PL. 3)

第1調査区中央部に位置し、楕円形の掘方を呈する。長辺0.8m・短径0.4mを測り、残存する深さは0.4mである。穴底の東辺が一段深くなる。黒曜石製の石鏃が出土している。

SP63 (Fig 10 PL. 5)

第2調査区西辺部に位置する。楕円形の平面形を呈し、長辺0.4m・短径0.3mを測り、残存する深さは0.3mである。掘立柱建物の柱穴と考えられる。覆土から須恵器坏蓋が出土している。

SP83 (Fig 10 PL. 5・6)

第2調査区中央部の北辺に位置する。土壙と表記しても良い円形の平面形を呈する穴で、径0.9m～1m、深さ0.8mを測る。底面は平坦で、壁面はやや外反しながら直線的に立ち上がる。覆土からは黒曜石の石鏃や多くの剥片が出土している。

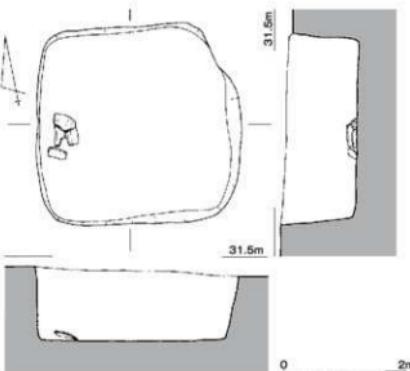


Fig. 15 SK05 遺構実測図 (1/40)

4. 遺物

(1) 壺穴住居 (S C)

SC04 (Fig. 16)

覆土中から土師器壺・高杯、黒曜石剥片の他に低温度酸化炎による須恵器片が多く出土している。

16は土師器の壺で頭部以下を欠く。**17**は土師器の小型浅鉢。

SC07 (Fig. 17, 18 PL. 10)

住居床面直上から須恵器壺・壺身・壺蓋・高杯、土師器壺・瓶、黒曜石剥片が出土している。**4**～**6**の壺蓋は、やや扁平な半球形を呈し、口径 13.2cm～13.5cm、器高 3.8cm～4.2cm を測る。口縁部と天井部との境は不明瞭である。胎土は 1mm～2mm 程の砂粒が多く含み、暗青灰色を呈する。天井部外面にはヘラ削り調整が施されているが、いずれも天井中心部から離れたところからヘラ削りを始める共通点を持つ。焼成はいずれも還元炎により硬質である。**3**は小型の土師器鉢で口径 10.7cm～10.9cm、器高 7.9cm を測る。底部は丸みを呈し、手持ちによるヘラ削り調整が行われている。**19**は須恵器高杯で脚部を欠く。杯部は口径 12.2cm が復元され、共伴する **4**～**6**の壺蓋と組み合うものであろう。**1**の瓶は、胴部の取手を欠くものの良好な状態である。底径 8.5cm・口径 22.6cm～23.4cm、器高 26.8cm を測る。円形に底が抜けた状態の底部から湾曲気味に立ち上がり、口縁部下 2.5cm のところから外反の度合いを強めて口縁端部を外方へ出させて丸く仕上げる。外面は刷毛目整形の後にナデ調整を施している。内面は口縁部下までヘラ削りが施されている。1mm～2mm 程の砂粒が多く含み、橙灰色を呈した硬質である。**2**は**1**の瓶とセット関係が推定される土師器の壺で、口径 22cm～22.8cm、器高 30cm、胴部最大径 18.5cm を測る。底部は狭小な平坦面を呈し、寸胴形の胴部から頸部で窄まり、口縁部は大きく外反する。器面全域には目の粗い刷毛目が残る。内面は底から頸部までヘラ削りを施している。胴部中位の外面には煤が付着する。頸部内面の径は 11.5cm を測り、**1**の瓶を据えてみると重なりは数 cm であるものと想定している。胎土は 1mm～4mm ほどの砂粒が多く含み、焼成は硬質である。**7**は土師器の壺で、口径 14.8cm、胴部最大径 19.7cm を測る。底部は欠き、胴部は寸胴形を呈し、頸部で窄まり、短い口縁部は外反する。口縁端部は丸く仕上げている。器面調整は、胴部外面には縱方向に刷毛を丁寧に施し、口縁部は縱方向に刷毛目を施した後にナデで仕上げている。胴部内面は底から頸部までヘラ削りを施し、口縁部は横方向の刷毛目を施した後にナデで仕上げている。胴部中位下の外面には煤が付着する。胎土は 1mm～3mm ほどの砂粒が多く含み、橙灰色を呈する。焼成は硬質である。**1**の瓶と重なりは小さいものの、共用は考えられる。**8**は須恵器の形状を呈する壺で、酸化炎焼成による。口径 16cm、胴部最大径 19cm が復元される。底部は欠き、胴部は球状を呈するものと考えられる。やや張り出した肩は頸部で窄まり、口縁は短く外反する。口縁端部は断面形が三角形状に張り出す。板叩きによる第2次成形の後、回転を用いた刷毛による調整を行っているが、器面に叩き目痕跡を残す。頸部下から口縁部は丁寧な横ナデ調整を施している。胴部内面には当具痕跡が部分的に認められるものの、大半はナデ調整の痕跡である。胎土は 1mm ほどの砂粒が主で、3mm を越えるような砂粒を含まない。橙灰色を呈し、硬質である。**1**の瓶との共用は考えられる。**9**は土師器の壺で、口径 25.6cm、胴部最大径 22cm が復元される。底部は欠くが、胴部は寸胴形を呈し、頸部の窄まりは無く、短い口縁部は外反する。口縁端部は丸く仕上げている。器面調整は、丁寧なナデで仕上げている。胴部内面は底から頸部までヘラ削りを施し、その上から部分的にナデしている。このため、頸部内面は明瞭な稜線となっている。口縁部はナデで仕上げている。胴部中位下の外面には煤が付着し、カマドに据え付けていたことを示す。胎土は 1mm～4mm ほどの砂粒を多く含み、暗橙褐色を呈する。焼成は極めて硬質である。**23**は土師器の壺である。口縁部と底部を欠くが、球体状の器形が復元される。第2次成形は器内

側に同心円文の掘り込みのある充て具と格子目状の刻み目のある叩き板によるものである。外面は叩き目痕跡を残し、内面はヘラ削りを施している。器壁は0.7cm～1cmと厚い。胎土は胎土は1mm～3mmほどの砂粒を多く含み、暗茶灰色を呈する。酸化炎焼成により硬質である。

SC08 (Fig 19.21 PL. 11)

遺物は、住居床面直上から須恵器壺・坏身・坏蓋・高杯、土師器壺、黒曜石剥片が出土している。20～22は底部を欠く坏身で、口径10cm・器高4cmほどが復元される。口縁部は内傾しながら立ち上がる。胎土は暗灰色～暗褐色を呈し、還元焼成により硬質である。

(2) 土壙 (S K)

SK01 (Fig 21 PL. 11)

遺物は、黒曜石製の石鎚が出土している。

SK05 (Fig 20 PL. 11)

遺物は床面西辺須恵器壺・皿蓋・壺、土師器壺、黒曜石剥片、炭などが出土している。11は須恵器皿の蓋で、口径18.6cm、器高2.5cmを測る。平坦な天井部中央に扁平なつまみが付く。口縁端部は直下に返しが延びる。胎土は淡灰白色を呈し、軟質である。1mmほどの砂粒を含むが、精選の感がある。重ね焼きの痕跡が認められる。12は須恵器皿の蓋で、口径18.4cm、器高1.8cmが復元される。平坦な天井部中央に扁平なつまみが付く。口縁端部は直下に返しが延びる。胎土は青灰色を呈し、硬質である。1mmほどの砂粒を含むが、精選の感がある。重ね焼きの痕跡が認められる。13・14は須恵器の坏である。14は口径13cm・器高2.6cmが復元され、胎土は灰色で硬質である。13は土師質的な軟質の坏で、口縁は大きく外傾しながら直線的に立ち上がる。15は高台は付く須恵器坏である。10は土師器の壺で、口径30cm、胴部最大径25cm、器高25cmが復元される。丸底の底部から立ち上がる胴部は寸胴形を呈し、頸部の窄まりは弱い。口縁部は外反する。口縁端部は丸く仕上げている。器面調整は、胴部外面には縱方向に刷毛を丁寧に施し、口縁部も縱方向に刷毛目を施した後に端部近くだけナデで仕上げている。胴部内面は底から頸部までヘラ削りを施しており、口縁部は横方向の刷毛目を施した後に粗いナデで仕上げている。このために頸部内面は明瞭な稜線となっている。外面は口縁端部まで煤が付着し、カマドに据え付けていたことを示す。胎土は1mm～3mmほどの砂粒を多く含み、暗橙灰色を呈する。焼成は極めて硬質である。

(3) 柱穴・小穴 (S P)

SP46 (Fig 21 PL. 11)

黒曜石製の石鎚が出土している。

SP83 (Fig 21 PL. 11)

埋土からは黒曜石の石鎚や多くの剥片が出土している。



Fig. 16 SC04 出土遺物実測図 (1/3)

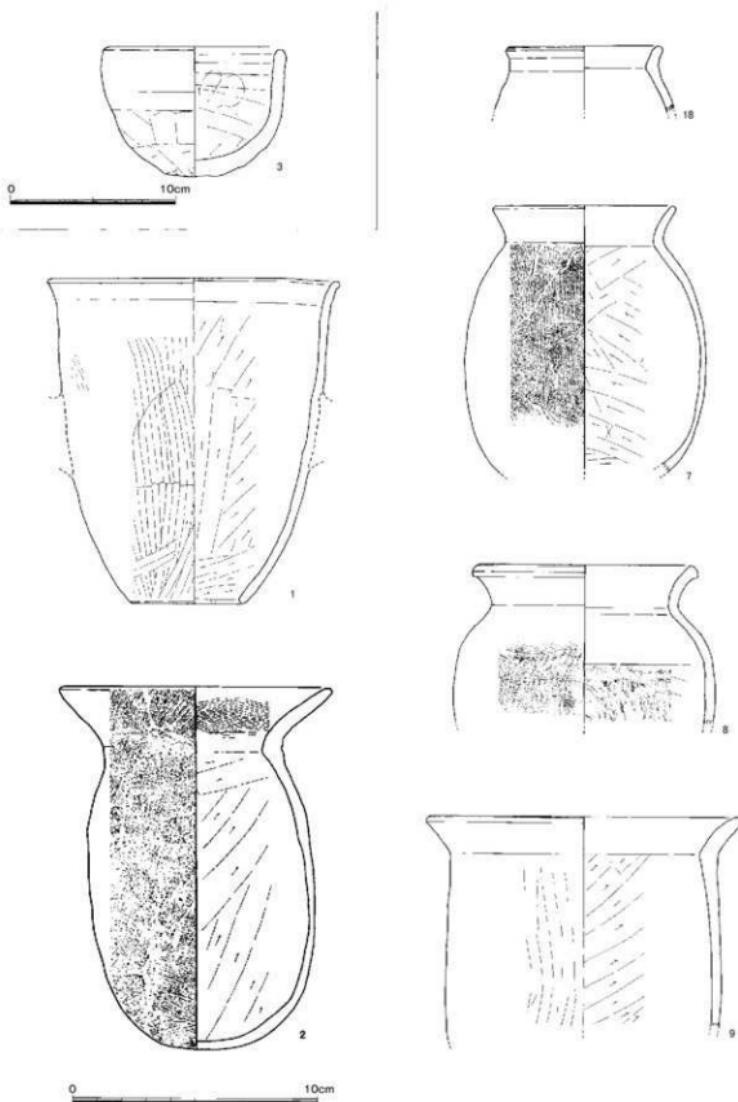


Fig. 17 SC07 出土遺物実測図① (1/3-1/4)

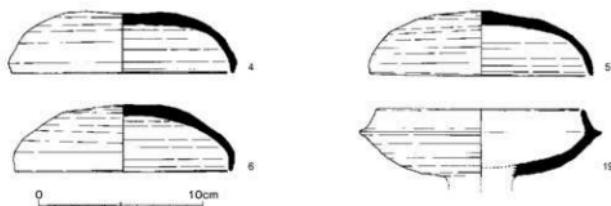


Fig. 18 SC07 出土遺物実測図② (1/3)

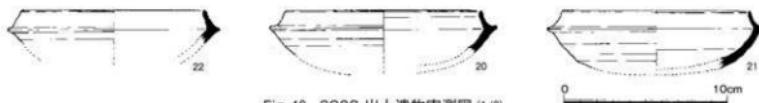


Fig. 19 SC08 出土遺物実測図 (1/3)

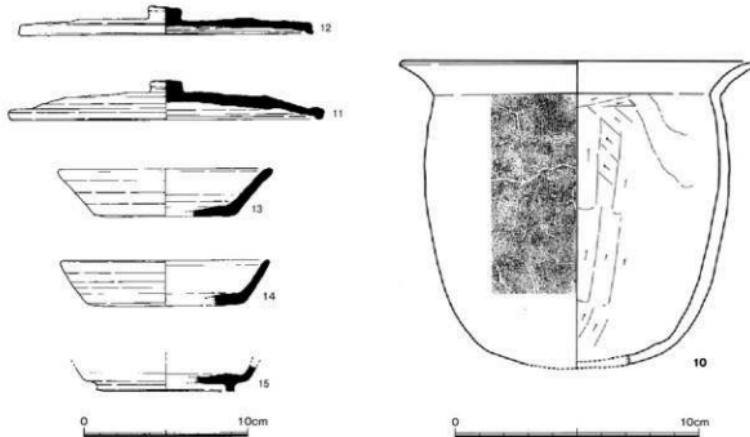


Fig. 20 SK05 出土遺物実測図 (1/3-1/4)

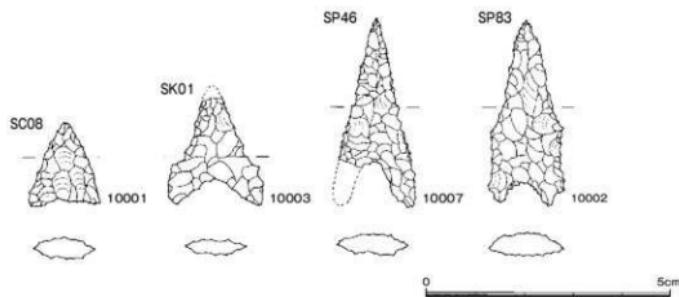


Fig. 21 出土石器実測図 (1/1)

第IV章 まとめ

今回の調査では、早良平野南東部、荒平山の西裾部に沿った低丘陵部における歴史の一端を初めて明らかにし、学術的価値の高い成果を得ることができた。遺物や遺構の状況から、当地では遅くとも縄文時代晚期には人々が定住的生活を開始し、6世紀中頃にはある程度の規模を呈する集落が形成され、奈良時代後半期にも集落の存在が考えられる。

本項では、調査で確認された遺構の特徴や背景を時代別にまとめ、今後の周辺地域における調査の際の検証点として提起するものである。

【縄文時代晚期】

縄文時代晚期の遺構としては土壙状のピットがあり、黒曜石製の鎌や剥片が出土している。剥片は調査区全体から満遍なく出土し、いずれも縦剥ぎによる。特にSP83からは多量の剥片が出土し、直接的根拠となる住居跡の検出には至らなかったが、定住的様相を示すものと考えられる。本調査地の西方に近接する重留遺跡からは晚期の竪穴住居が検出されていることから、当該遺跡における集落の規模や構成の解明が待たれる。

【古墳時代】

当該期の竪穴住居は3棟を検出した。竪穴規模に差異はあるものの、いずれも方形の平面プランを呈し、北面壁にはカマドを設え、排煙装置である地下式煙道をカマド奥壁から斜行するように設置して建物から離れたところに排煙口を設けるという共通点が認められる。住居の造営年代は出土遺物から6世紀中頃～後半と推定され、各住居が同時もしくは若干の時間差を持って存在していた可能性が考えられる。本調査地や隣接地における試掘調査においても同時期の竪穴住居が広範囲に展開していくことが明らかとなっており、集落がかなりな戸数から構成されていると推測される。

6世紀後半を中心として荒平山西裾に広がる丘陵に形成された古墳群のひとつである荒平古墳群や三郎丸古墳群の被葬者が影響力を行使していた集落は、まさしく今回の調査地である熊本遺跡を含むヒワタシ遺跡・重留遺跡・東入部遺跡などに所在した集落そのものであると考えられる。

熊本遺跡は、南北に伸びる低丘陵の東側と西側を金屑川水系の支流（三郎丸川ほか）で画された独立丘陵の地形に立地する。今回の6世紀後半～7世紀初頭を中心とした集落は、この自然地形で形成された範囲と想定するのが妥当と考える。

【奈良時代】

同時期の遺構としては隅丸方形の平面プランを呈する土壙のSK05が挙げられる。8世紀後半期に比定される須恵器と土師器が集積した状態で出土している。調査区内では住居跡などを検出するに至らなかったが、壺の器面が焼けた状態であることなどから、極めて近辺において住居跡などの集落遺構が存在しているものと考えられる。出土遺物からは寸断期があるものの、当該期のこれらは、先代の時代から継続して存在する集落の歴史的変遷の一時期、一部分だけを取り出したものと言えよう。この集落を含む重留から東入部の一帯における集落が、中世の清末遺跡に見られる館の支配者の影響下に取り込まれていくものと考えられる。

図 版

PLATES



(SC07 調査風景)



調査地周辺航空写真 (1961年撮影)

【国土地理院所蔵】



調査地周辺航空写真（1987年撮影）

【国土地理院所蔵】



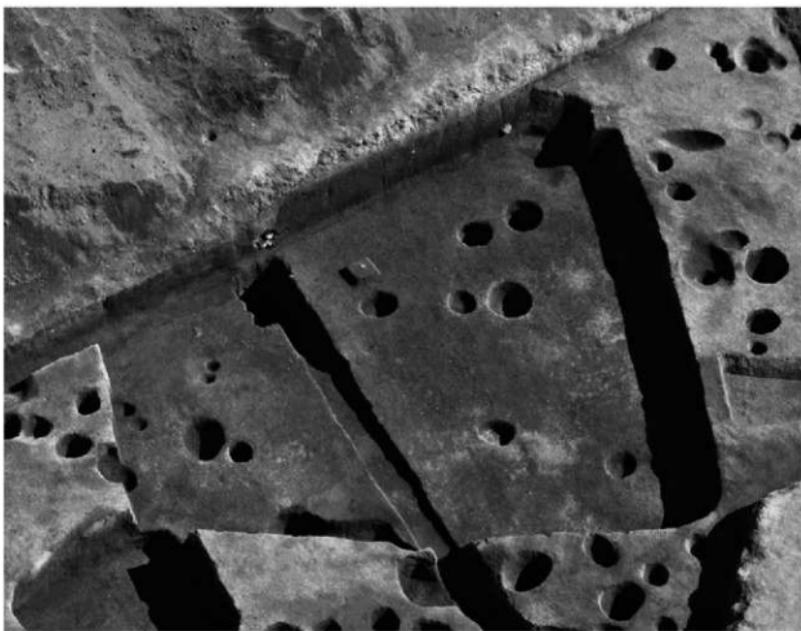
(1) 第1調査区(南から)



(1) 第1調査区(北から)



(1) SC04 (南東から)



(2) SC04 (北西から)



(1) 第2調査区(西から)



(1) 第2調査区中央部(北から)



(2) SC07(西から)



(1) SC07 遺物出土状況(西から)



(2) SC07 遺物出土状況(南から)



(3) SC07 遺物出土状況(南から)



(4) SC07 瓶出土状況(南西から)



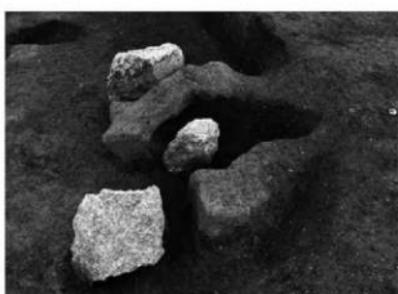
(5) SC07 カマド検出状況(南から)



(6) SC07 カマド内支脚検出状況(南から)



(7) SC07 カマド壁体裁断状況(南から)



(8) SC07 カマド壁体裁断状況(東から)



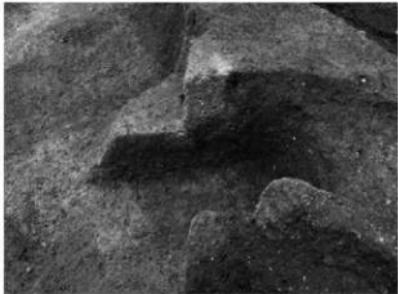
(1) SC08 (北東から)



(2) SC08 カマド検出状況 (南西から)



(3) SC08 カマド壁体裁断状況 (南西から)



(4) SC08 カマド壁体裁断状況 (南東から)

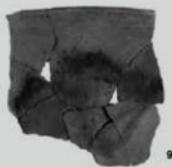


(1) SK05 (東から)



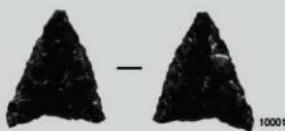
(2) 第3調査区 (西から)

SC07

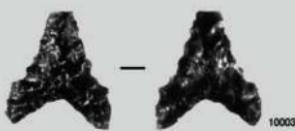


出土遺物 (1)

SK06



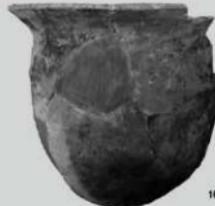
SK01



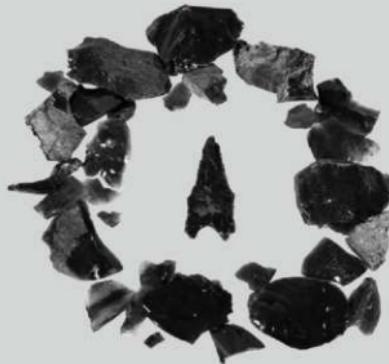
SK05



小穴 SP46



SP63



出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	くまもといせき 3						
書名	熊本遺跡 3						
副書名	第3次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1258集						
編著者名	藏本正志						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1						
発行年月日	2015年3月25日						
ふりがな 所収道路名	コード 市町村 道路番号	北緯 東經	発掘期間	発掘面積 (m²)	発掘原因		
くまもといせき 熊本遺跡	ふくおかさんくわくさんくわく 福岡県福岡市 さわいじやくせいじゆ 早良区東入路2丁目 1785番1, 1786番1 1787番1, 1788番4	40137 0338 33°31'29" 130°20'17"	20130819 ~ 20131018	365.3	記録保存調査		
所収道路名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
熊本遺跡	集落	弥生時代～古墳時代	堅穴住居・土塙・柱穴	石器・弥生土器・土師器・須恵器	作り附け窓を持つ古墳時代の堅穴住居群		
要約	<p>調査地は、早良平野奥部の東縁を南下する平山の西麓に沿って連続して存在する道路のひとつである熊本遺跡の南央部に位置する焼地で、標高約32mを測る。この全円周川の支流によって解析・形成された扇状地の底位段丘上に立地する周辺遺跡には、数少ない発掘調査と試掘調査によって古墳時代・古代の遺構の存在が指摘されている。本調査では地表下30cmの黄褐色粘質土上面で遺構検出を行い、縄文時代後・晩期の土塙1基、古墳時代後期の堅穴住居4棟、奈良時代の土塙1基、柱穴、小穴等を発見した。縄文時代の土塙からは黒曜石・磨石類のほかに多量の酒片が出土している。堅穴住居は方形の平面形を呈し、北壁には作り付けのカマドを有する。奈良時代の土塙は方形の平面形を呈し、土師器や須恵器がまとまって出土した。柱穴の大半は径25cm前後を測るが、明確な建物としては確認には至らなかった。</p> <p>今回の調査では、早良平野南東部、荒平山西部の国道263号線に沿った低丘陵部における歴史の一端を初めて明らかにし、学術的価値の高い成果を得ることができた。遺物や遺構の状況から、当地では遙くとも縄文時代晩期には人々が定住的生活を開始し、6世紀後半にはある程度の規模を呈する集落が形成され、奈良時代前期にも集落の存在が考えられる。</p>						

熊本遺跡3

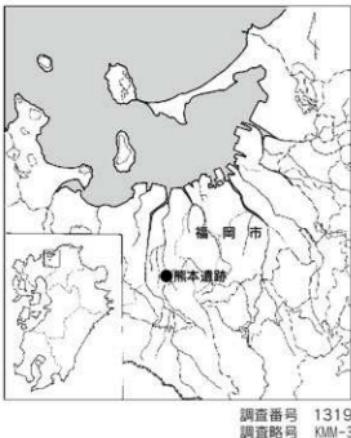
— 第3次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1258集

発行 福岡市教育委員会
 福岡市中央区天神1-8-1
 Tel 092(711)4667
 発行日 平成27年3月25日
 印刷 石橋印刷株式会社
 福岡市博多区東比恵

KUMAMOTO SITE

THE REPORT OF THE 3rd EXACAVATIONS
OF THE REMAINS OF KUMAMOTO SITE
IN FUKUOKA, JAPAN



MARCH 2015
FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION
JAPAN